



ビニール傘と
里山くん



ジン太

1 佐藤くんと里山くん

傘を畳んで、ビルの裏に着地する。ほっと一息ついて、傘をくるくる巻くと、消火器の裏に隠した。

「おい、傘通学は禁止されてるはずだぞ！」突然後ろから野太い声。

「す、すみません！」先生に見つかった！？

「ぎゃはは！ なんてね。驚いた？」

それが、里山との物語のはじまりだった。

学校前の交差点、傘で風を捉えてふわふわ浮かぶ人にぶつからないように、ぼくらは並んで信号待ち。

「佐藤が傘持ってるなんて知らなかったよ」隣の里山が言う。同じクラスなのに、今の今までともに話すなんて初めてだ。

「免許取ったんだよ」

「傘は？」

「傘は兄貴の」ドキドキしながら答えた。ほんとうは、あの傘は拾ったものだ。

「なあ、里山くん……学校に告げ口したり、しないよね？」背が高い里山を見上げた。こんなに身長差があったのか。ちょっとショックだ。

「里山、でいいよ。でもさ、頼み事がある……俺も傘に乗せてくれねえか？」里山は目を輝かせて聞いてきた。

「まあそれくらいなら」

「やった！」

「って、里山、免許は？」

「持ってない」。里山は、当たり前のように答えた。

「だめじゃん。傘は難しいんだぞ。突風吹いたらおちよこになるし、落ちたら死ぬし。それに、無免許がばれたら停学どころか退学だ。」

「えー……そうなの？」里山は、急にしゅんとした顔をした。でかい図体も急に小さくなったみたいだ。

（あ、今のかわいい…！）

里山に、先生に告げ口されたくなければ乗せろと恫喝されたら断ってたかもしれないが、こんな顔を見せられたらかなわない。

「仕方ないなあ。じゃあ練習しよう」

「まじっすか！ すぐ乗りたい！ 今夜でも！」

学校に着くまでに、日時も決まった。場所は学校のグラウンド。時間は今日の真夜中だ。

2 グラウンドと里山くん

グラウンドは夜は人もいないし、広くて練習にもってこい。もし誰か来ても傘でひょいっと柵を超えれば、すぐに森に逃げられる。

「おーし、佐藤！練習しようぜ！」深夜なのに、里山は大晦日みたいに元気だった。まっくらなグラウンドに二人きり。ぼろぼろのビニール傘を開くと、里山が「おお」と声を上げた。

基本的なことから教えた。傘の開き方。安全な閉じ方。突風が来た場合の対処法。里山は真剣に聞いていた。

「先生！ しつもん！」

「ハイなんですか、里山くん」

「これって、二人でも乗れますか？」

「二人乗り用の傘はあるけど、これはビニールだから大きき足りないねー。法律的にもよくないですね」

「えっ。俺、一人で飛ぶなんて怖いよ……」と、里山は下を向いた。ちくしょう。こんなの反則だ。

「大丈夫。ほんの数メートルなら二人でも乗れるし。まあ、誰にも見られてないから始めはぼくと一緒に乗るよ」

「やった！」里山はガッツポーズして笑った。

本当は、ぼくが傘を操作できればいいんだけど、里山のほうがぼくより背が高い。二人乗りするなら背が高いほうが傘を持たないと飛べない。

「いい？ぼくが一緒に持つから、開きすぎないように、ゆっくりとね」。傘を持つ里山の手を、ぼくの手ひらで包み込んだ。里山の手は大きくて、ぼくの手じゃ包めなかった。

ぼくらは手を重ねて体を寄せた。でかい図体の二人だから、かなり密着してないと傘からはみ出そうだ。もぞもぞしていると、里山がぼくの腰に手を回して、ぐっと引き寄せた。びっくりして、里山の顔を見上げると、真剣な顔で目が据わっている。緊張してるんだろう。

と、その時だった。

「何してるんだ！」

「やばい、見回りだ！」

逃げないと！ぼくが里山に指示を出すより早く、里山は勢いよく傘を開いた。

ごおっという風圧と、急な重力を伴って、ぼくたちはぐんぐん急上昇した。

（やばい。開き過ぎだ！）コントロールしようにも、傘を握ってるのは里山だからぼくには何もできない。傘はさらに上昇を続けて、校舎も軽々と越えた。

「里山！あぶない！開き過ぎだ！」

「おれたち、飛んでるぞ！」里山は笑っていた。そしてぼくらはあたりを見回して、声にならない声をあげた。

学校も、家も、町も、ぜんぶ夜の空と一緒にあって、ぼくらだけ宇宙にぽっかりと浮かんでるみたいだ。

傘でこんなに高く登るなんて、法律で禁止されてるし、危険だからやろうとも思わない。けれど、いまこの時だけは、ただ風景に見とれていたんだ。

傘がぎしっときしんだ。

「里山？さすがにこれ以上は！」

里山は、傘をすこし閉じて、上昇を止めると、ぼくの体を片手でぐっと掴んだまま、傘で風を受けとめて、ふんわりと風に乗った。ほとんど無理も無駄もない、滑らかな動作だった。

「騙したな！」ぼくは叫んだ、里山は傘乗り上級者だったのだ。

「騙しててごめんな」いたずらっぽく笑いながら里山が言う。

「けっこう、プライドが傷ついたぞ……」そう言うと、里山はビニール傘を透かして月を見上げながら言った。

「一緒に飛んでみたかったんだ。おまえと」

「えっ？」

「あのな、俺……」

里山が何か言おうとしたとき、突風が吹いた。

「わあっ！！！」

うまく傘をスライドさせてやり過ぎそうとしたけど、二人分の遠心力に傘のほうを持ちそうもない。

「佐藤！」里山が叫んだ。「絶対離すな！」

その声に答える代わりに、里山の腰をぎゅっと掴んだ。

3 明るい夜空と里山くん

ぼくたちはきりもみしながら落下していった。

どこに落ちる？ どこに落ちても、ぼくたちは地面に激突だ。死ぬ？ ぼくたちが？ こんなにあっけなく？

「うおおお！ せっかく好きな人と飛べたのに、こんなところで死んでたまるか！」里山が吠える。

(こ、こいつ、どさくさまぎれで告白しやがった！)

「ぼくも好きだあっ！ 死ぬな！」

お互いの腰に回した手に、ぎゅっと力を入れた。

「よく見ろ！ 落下予測地点、あそこに空気の固まりがある。森のぎりぎり上だ。それにバウンドすれば、落下の勢いを完全に殺せる！」

「見えねえよ！」

「俺には見える！ 俺を信じろ！」

空気を捉えるために、傘を一度閉じた。一直線に地面へと落ちていく。

「今だ！」里山のかけ声で、傘を開こうとした。

「開けえっ！！」

二人でひとつの傘の取手を握って、二人分の力でもまだ開かない。重さと落下速度で、傘に負担がかかっているのだ。

「開けええっっっっっ！！」

ばんっ！！

突然、傘が軽くなって、大きな音とともに傘が開いた。減速し、ふんわりと森の中に着地。

「た...助かったあ！」安堵の表情で、里山のほうを見る。しかし、里山はそこにはいなかった。

「.....里山？ 里山——っ！！」

まさか、里山は傘を開く前に飛ばされた？ 突然傘が軽くなったあの時、ぼくを助けるために手を離れたんだろうか。

「ばかばかばか、里山のばかー！！ ぼくのこと好きっていったじゃないか！」ぼくはいつのまにか泣きじゃくっていた。

森の道に出る。そこで見つけたものに息がとまった。月に照らされて銀色に光る砂利の上に、赤い血が、点々と.....

血は、森の真ん中に向かっていているようだった。

(神様、お願いします！ 里山が無事でいてください！)

ぼくは生まれて初めて神様に祈った。

森の真ん中、原っぱの中心に里山は立っていた。月をじっと見上げていた。

一瞬、声をかけるのを忘れた。月の光に照らされている里山は彫刻のようで、手が届かない別の世界の貴いものに見えた。

月を見上げていた里山は、ぼくに気がついたのか、ゆっくりと顔をこっちに向けた。

「佐藤」

里山は、唇の動きだけでぼくを呼んだ。

「里山。よかった。大丈夫そうで。どこかケガは……」

そう言いながら里山に近づくとき、里山の後ろになにか棒のようなものが見えた。里山は傘を持っているんだと思った。

「……………」

里山がなにか言おう口を開いた瞬間、がくりと膝をついて、里山が倒れた。

その時気がついた。木の枝が足に刺さっていたのだ。

「冗談だろ……」

里山を抱えて、ぼくは月を見あげた。ああ、けれど月は遠過ぎた。

ぼくたちが飛んで行くには。それに傘は壊れてしまった。

4 ビニール傘と里山くん

それから。里山は入院して、ぼくは学校を退学になった。親にも怒られたし、里山の両親には罵倒された。里山に会いたかった。でも会えなかった。

そういえば、今日は学校の卒業式だ。バイト帰り、卒業祝いで浮かれた生徒たちを見た。里山は元気かな。道路では、ふわふわと人が傘に乗って流れている。夕焼け色と傘の影を見ていると、なぜか涙が流れて視界がにじむ。泣くもんかと目をこすってもまだ視界がにじんできた。あれ？ 涙はとまったのに。

「傘に入らねえ？」後ろ斜め上からの声。里山だった。ビニール傘を後ろから、ぼくの前に差し出していたのだ。

里山は、前よりも背が高くなっていた。

「あ……」

うれしくて、会いたくなくて。会いたくて。声がうまく出ない。

「でも……ぼく、免許停止だよ」

「いいんだ。俺、取り直したんだ。それにほら。これ二人乗りだよ」

ぼくは泣き崩れた。

「ぼくを……許してくれるの？」

ぼくは逃げ出したのに。里山を傷つけてしまったことから。そして、里山がぼくのことを好きだということから。そして、自分の気持ちから。

「いいんだよ。ほら、いい風が吹いてる。それに元はと言えば嘘付いて傷つけたのは俺の方だ。だから、今度はちゃんと言う……一緒に飛んでくれる？」

ぼくは返事の代わりに、里山が差し出した傘をその手ごとつかんだ。

ビニール傘と里山くん

<http://p.booklog.jp/book/26831>

著者：ジン太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/fujimarujinta/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26831>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26831>